

編 集 後 記

私が「臨床神経学」の編集委員を務めさせていただいて2年ほど経ちましたが、今回の編集作業は改めて脳神経内科の臨床の原点を勉強する良い機会となりました。とくに症例報告において、表現力が豊かで含蓄のある日本語を駆使して、日本人の感性をもって、症例が現実的に提示され、巧みに展開された考察を読むことは興味深く、かつ面白く感じられました。また、実際に掲載された症例報告のなかには、インパクトファクター（IF）が付与されている英文雑誌にアクセプトされてもおかしくないほどのクオリティーの高いものがありました。しかしながら、「臨床神経学」はPubMedに収録されているものの、英語はアブストラクトのみで本文は日本語ですから、残念なことに外国人は読めません。一方、2014年に刊行された神経学会の英文誌「Neurology and Clinical Neuroscience」は、雑誌の引用件数を増やすために原著論文の掲載が大切なかもしれませんが、未だIFがありません。ですから今後は、積極的に症例報告を多く受け入れ、全文をオープンアクセス

として、日本の症例報告のすばらしさを世界に知ってもらう機会にさせていただきたいと思いました。

また、査読しながら、症例報告も科学論文と同じように、冒頭に結論を明確に記述することを徹底しなければならぬと感じました。これは当然のきまり事ですが、意外とそうなってはいませんでした。前後の文脈から徐々に内容や意味が明らかになって、隠されていた本当の結論が最後に出てくるような論文が何点かありました。読み物としては面白いのですが、起承転結のエッセイのようです。「臨床神経学」は若手の人材育成の場でもあります。症例報告であったとしても科学的思考・論理展開を忘れずに、世界レベルで正当に評価されるようなものを目指してほしいと思います。そうすれば仮に日本語で書いた症例報告を英語に直訳して公表したとしても大筋は理解してもらえるかもしれません。最後に、これからの「臨床神経学」の益々の発展をお祈り申し上げます。

(辻野 彰)

〈 編 集 委 員 〉

編集委員長	小野寺 理	編集副委員長	三澤 園子		
編集幹事	石浦 浩之	漆谷 真	杉江 和馬		
編集委員	今井 富裕	木下 真幸子	古賀 政利	櫻井 圭太	柴田 護
下畑 享良	鈴木 匡子	辻野 彰	坪井 義夫	中嶋 秀人	新野 正明

「臨床神経学」	第62巻 第9号	2022年9月1日発行	
編 集 者	東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル		一般社団法人日本神経学会
発 行 者	東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル		西 山 和 利
印 刷 所	〔郵便番号 602-8048〕京都市上京区下立売通小川東入		中西印刷株式会社

発 行 所 〔郵便番号 113-0034〕東京都文京区湯島二丁目 31 番 21 号 一丸ビル
日 本 神 経 学 会

郵便振替口座 東京 00120-0-12550

TEL. 03-3815-1080 FAX. 03-3815-1931

ホームページアドレス：<http://www.neurology-jp.org/>